

# ヴェルネルの法則の一般化における諸問題

上野誠治

## 1. はじめに

インド・ヨーロッパ祖語からゲルマン語派が分岐する際に、グリムの法則（第1次子音推移）と呼ばれる閉鎖音の組織的変化が起こった。後に、グリムの法則の例外を説明したものがヴェルネルの法則である。その結果、無声閉鎖音の p, t, k は直前に（高低）アクセントがあれば有声化することになった。

それとは別に、その後、中英語後期から16世紀頃にかけて、文中においてアクセントがない場合や、弱い場合に、無声摩擦音の f, θ, s, 無声破擦音の tʃ, 子音連結の ks などが有声化する。この現象は、その音変化の類似性から「英語におけるヴェルネルの法則」または、それを説明したデンマークの言語学者に因んで「イエスペルセンの法則」とも呼ばれる。

このヴェルネルの法則の一般化により、現代英語の発音に見られる「無声子音：有声子音」の対立および語末子音の有声化が説明される。しかし、実際には、第二アクセントの有無、類推、綴り字発音の影響などにより、必ずしも法則通りとはならないこともある。本稿では、ヴェルネルの法則の一般化を再考しつつ、イエスペルセンの法則の適用条件ではなく、むしろその適用を阻止する、または取り消す要因の方を探っていく。

## 2. 英語におけるヴェルネルの法則（イエスペルセンの法則）

安藤（2002:33）は、「この Verner の法則は『アクセントが子音 [f, θ, s, ks] の直前にない場合、その子音は有声化する』と一般化するならば、現代英語の『無声子音：有声子音』の対立を説明することができる」と述べているが、その例示の仕方には誤植や混乱があるように思われる。一方、その元になったと思われる Jespersen（1922:200-205）は、当該の現象を /f/ > [v], /p/ > [ð], /s/ > [z], /ks/ > [gz], /tʃ/ > [dʒ] に5分類して以下のように考察している。

[1] /f/ > [v] : (1)に示すように ME の -if が ModE で -ive と変化しているのは、f の直前の母音 i にアクセントが置かれていないためである。一方、(2)の off は前置詞 of に相当するが o にアクセントが置かれるために [ɔf] と発音され、そのことが副詞の off と同じ綴りに反映されている。

(1) L *activus* > (O)F *actif, -ive* > ME *actif, -ive* > ModE *active*

(2) “Which of my ships art thou master off?” “Of the Speranza.”

（「お前は俺のどの船の船長だ？」「スペランツァ号の（船長）です」）

[2] /p/ > [ð] : 国際音声記号（International phonetic alphabet: IPA）で表記すれば、/θ/ > [ð] となるが、例として、with を取り上げ、以下のように述べている。

(3) ... *with*, where [ð] was first developed when weakly stressed in the sentence, and in *within*, *without*, *withal*. Later it was extended to all positions, though [p] is found even now in many people’s pronunciation of *wherewith*, *forthwith*; ...

前置詞 *with* が文中で弱いアクセントしか置かれなかった場合や、*within* などのように直前にアクセントがない場合に th は有声化した。その後、有声化はすべての位置の *with* に拡張されたが、*wherewith*, *forthwith* などでは、いったん有声化した後、直前に（第二）アクセントが置かれるため、再び th が無声化する場合もあった。

(4) a. *wherewith* [-wið, -wiθ] (*Merriam-Webster*)

b. *forthwith* [-wið, -wiθ| -wiθ, -wið] (*Longman*)

[3] /s/ > [z] : *design* (F *dessiner*), *dessert*, *resémble*, *resént*, *posséss*, *absólve*, *obsérve* のような語では、語中の s は直前にアクセントがないため有声音であるが、借用前のフランス語ではすべて [s] であった。また、*àbsolútion* と *òbservation*, *òbservátor* を比較して以下のように述べている。

(5) The voiceless [s] is preserved in *absolution*, because /bs/ followed **after a half-strong vowel**; but in *observation* and *observator* [z] is due to the **analogy of observe**. (emphases added)

すなわち *absolution* の場合は、bs の直前に（第二）アクセントが置かれるため s は無声音となる。一方、*observation* なども状況は同じであるにもかかわらず有声音となるのは、*observe* [əbzə:rv] の類推に因る。換言すると、（第二）アクセントの存在は一般的に、有声化を阻害するが、派生語における基体（base）の発音がそれに優先するということである。

(6) *àbsolútion* [əbsəlú:fən]

(7) *observ*ation [ˌɒbzə'veɪʃən]əb-, *observ*ator [ˌɒbzə'veɪtəɹ]

さらに以下に述べられているように、有声化を阻害する要因として第二アクセントの後 (*disagree*, *disadvantage* など) と無声子音の前 (*displease*, *distrust* など) の位置を挙げている。なお、*dishonour*, *disown*, *discern* の接頭辞 *dis-* は通常 [dis] と発音されるが、(9) に例示するようにイエスペルセンの法則が適用されて [diz] と発音されることもある。

(8) The prefix *dis-* became /diz/ before a stressed syllable: *disaster*, *disease*, *dishonour*, *disown*, also *dissolve* and *discern* in spite of *ss*, *sc*; but /s/ was kept unchanged **after secondary stress**: *disagree*, *disadvantage*, *disobey*, as well as **before a voiceless consonant**; *displease*, *distrust*, *discourage*, *disfigure*, etc. (emphases added)

(9)

<b>dishon</b> or, <b>dishon</b> our <i>noun, verb</i> UK ʤ US ʤ <b>dis</b> 'ɒn  ə dɪz-    -'ɑ:n  ə dishonored, ~oured əd    ər d dishonoring, ~ouring ər_ɪŋ dishonors, ~ours əz    ərz	<b>discern</b> UK ʤ US ʤ <b>di</b> 'sɜ:n də-, -'zɜ:n    'sɜ:n -'zɜ:n discerned d discerningly ɪŋ /li discerns z
--	--

(Longman Pronunciation Dictionary, 3<sup>rd</sup> ed.)

以上のことから、接頭辞 *dis-* を含む語で基体にアクセントが置かれる場合、原則として [diz] となるが、*dis-* が接頭辞として基体から分離すると認識されやすい場合には [dis] と発音される傾向が見られる。*dishonour* は当初は [diz-] と発音されたが、*dis-honour* と分析されやすいために、その後、[dis] が一般的になったと思われる。*disguise*, *disgust*, *disgrace* などと同様であろう。あるいは、例えば、*disguise* において、イエスペルセンの法則が適用して生じた [dizgáiz] が、その後、異化 (dissimilation) によって結果的に [disgáiz] になったのかもしれない。

[4] /ks/ > [gz] : [3] の特殊な事例とされ、*exhibit*, *exert* などの場合には [gz] となるが、*exhibition*, *exercise* などのように直前に (第二) アクセントがある場合 [ks] と発音される。一方、*vexation* では直前の母音にアクセントがないため [gz] が期待されるが、実際は無声音であり、それは動詞 *vex* の類推に因る。したがって *relaxation* [ri:lækséɪʃən] が [ks] という発音を持つのも、*relax* の類推に因る。なお、日本語では通常「リラクゼーション」のように濁音の「ゼ」で発音されるが、「語末から数えて3つ目の音節に、アクセントを置く」という「外来語のアクセント規則」(松森ほか 2012:132、窪菌 2006:20) により、「ゼー」の音節にアクセントが置かれるためかもしれない。

[5] /tʃ/ > [dʒ] : *knowledge*, *cabbage* などは、中英語時代はそれぞれ *knowleche*, *cabbach* であり、語末は [tʃ] という発音だった。しかし、直前の母音にアクセントがないため有声音となり、それが現代英語の綴りに反映されたと考えられる。*spinach* も *cabbage* と同様に有声音の発音を反映した *spinage* の綴りが期待され、一部の辞書 (岩崎 1973) にはその記載があるものの、一般的に、その綴りと発音は *spinach* [spínɪtʃ|-nɪdʒ,-nɪtʃ] である。類例に *Greenwich*, *sandwich* 等がある。米語で綴りと発音が一致するのは綴り字発音に因るものと思われる。

### 3. まとめ

以上、Jespersen が挙げた 5 つの場合について、代表的な事例を中心に概観したが、清水 (2012) が述べるように、直前の母音にアクセントがないすべての場合にイエスペルセンの法則が適用し当該の子音が有声化するわけではない。

(10) 「無声摩擦音は有声音間で直前の音節にアクセントがないときに限って、有声化した」という記述が散見されるが、厳密には正しくない。ゲルマン語の摩擦音には有声 (軟音) と無声 (硬音) の対立が希薄であり、語中の摩擦音は有声化する傾向があった。(清水 2012:64)

したがって、本来イエスペルセンの法則が適用する環境で、以下のような要因がある場合には、その適用が阻止され有声化が阻害される確率が高くなる、と考えるのが適当である：①直前の音節に (第二) アクセントがある場合、②関連する語の類推が働く場合、③接辞と基体の間に明確な境界が感じられる場合、④綴り字発音が優先される場合、(本稿では触れる余裕がなかったが) ⑤借用時期が影響する場合、⑥馴染みのない語の場合など。

### 参考文献

- 安藤貞雄 (2002) 『英語史入門』 開拓社。  
岩崎民平 (1973) 『現代英和辞典』 研究社。  
Jespersen, Otto (1922) *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part I. Allen and Unwin.  
窪菌晴夫 (2006) 『アクセントの法則』 岩波書店。  
松森晶子、新田哲夫、木部暢子、中井幸比古 (編著) (2012) 『日本語アクセント入門』 三省堂。  
清水 誠 (2012) 『ゲルマン語入門』 三省堂。  
Wells, John C. (2008) *Longman Pronunciation Dictionary*. 3<sup>rd</sup> ed. Pearson Education Limited.